

(一) 本論文の概要

(1) 本論文の問題意識

本論文における主たる問いは次の二点である。第一に、ハンセン病に対する差別はなぜなくなるのか。第二に、ハンセン病差別をなくす具体的方策として、どのようなものが可能か、ということである。

このような問いが生まれてくる背景は次のように要約される。ハンセン病は治療法が確立され、適切な治療を行えば完治する。日本の場合、ハンセン病に対する差別を助長する法律(らい予防法)も、1996年に廃止された。また、同法にのっとり実施されてきたハンセン病に対する国家政策(終生隔離政策)も、2001年のハンセン病違憲国家賠償訴訟にて、その誤りが認められた。

しかしながら、2003年には温泉ホテルがハンセン病回復者に対して宿泊を拒否する事件が起こり、かつ宿泊を拒否された回復者に対して多くの批判文書が寄せられた。一般論としては治療法の確立、法の改革、裁判における判決など、ハンセン病の差別を軽減させる条件は整ってきており、人びともそれを認識している。それにもかかわらず、ハンセン病に対する差別はなぜ存続するのか。これが本論文の一つ目の問いである。

この第一の問いに対して、本論では次のアプローチから答えようとする。まず「身体の不調」を社会学・人類学的な観点から論じる臨床社会学、ないしは医療人類学を参照して問題を整理する。そこから「身体の不調」に対する差別が生まれる原因を探る。

ここで見定めた問題に対して、次に具体的にどのような対応が可能か、という運動論的な視点を導入する。これが本論における二番目の問いであり、ハンセン病差別をなくす具体的方策として、どのようなものが可能かを検討する。

(2) 本論文の要旨と主張

本論全体で試みていることは、これまで歴史学やライフストーリーの社会学などで論じられることの多かったハンセン病問題を、経済社会情勢を踏まえてより広範な分野からアプローチすることである。どのような社会問題も、それが生まれた背景がある。今日もなお、ハンセン病の問題が生じている事実を鑑み、ハンセン病の差別問題を、今日的な情勢のなかで位置づける。

今日の情勢とはたとえば、雇用情勢の悪化であり、それは「経済的な問題」とみなされる。しかしそれは同時に、貧困化した若年層の労働における承認の不足という「文化的な次元の問題」をも引き起こす。本論は、それが排他的な趨勢が生み、差別を生み出す土壌となっていることを示し、その他を含む全体的な情勢に、ハンセン病問題を位置づけることを試みている。

これらをより深く検討するために、社会哲学的な抽象度の高い概念——「文化コード」「名づけの権力」「再分配と承認」「公共圏と親密圏」——に依拠しながら考察している。一方でハンセン病問題やそれに取り組むボランティアなどの事象を検討すると同時に、

他方でこのような抽象度の高い概念を手掛かりに、その事象の背後にある意味を探っている。

ただし本論は、こうした考察は学問分野を越境するがゆえに、リスクが高い試みであることを意識しながら、「新たな社会を切り開く」ために「理論とファクトの双方向的な考察」を試みている。

以上のような考察から、本論文では、ハンセン病の表象の問題こそが、差別問題の鍵であることを明らかにし、その表象を変容させる道筋を「文化コード」や「名づけの権力」といった概念を手掛かりにして理論的に提示する。さらにその道筋に具体性をもたせるため、中国におけるハンセン病回復村にて、おもに学生らによって実施されているワークキャンプ活動(労働奉仕型ボランティア活動)に着目し、その特性に関して、親密圏と公共圏の概念を用いて理論的な考察を踏まえつつ、フィールドワークもまじえて明らかにする。

(二) 本論文の目次

序章 本論文における主たる問い、目的、研究の方法、およびその意義

主たる問いとその背景

研究の方法

本論文の意義

第一章 病いの表象——医療人類学・医療社会学からのアプローチ

第一節 「機械論的人間観」と「健康の生物医学モデル」

第二節 「病い」(illness)、「疾患」(disease)、「病気」(sickness)

——「身体の不調」に対する意味の3つの次元

第三節 「病い」の意味の4つの次元

社会的に与えられる「病いの意味」

病いの意味の個人的構築

第四節 病いの社会的位置づけと時代的病い

——エリズリッシュ／ピエレの社会学的視点

第五節 スーザン・ソントグの視点——病いの「隠喩」と認知枠組みの時代的変遷

第六節 サンダー・ギルマンと「病いの表象」

——文化的社会的安定装置としての他者化

「病い」の構築メカニズム

「病い」の社会的伝染性

第七節 小括

第二章 「病い」(illness)、「疾患」(disease)、「病気」(sickness)としてのハンセン病

第一節 「疾患」としてのハンセン病

治療法の確立以前、確立以後

慢性細菌感染症

徴候と病型、および治療に要する期間

第二節 「病氣」としてのハンセン病

「癩予防ニ関スル件」「癩予防法」「らい予防法」

「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟

「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」

第三節 「病い」としてのハンセン病

ハンセン病という診断

「病い」としてのハンセン病の時代的変遷

——中世日本における仏教的世界観とハンセン病

近世日本におけるハンセン病——「癩の家筋」

近代日本におけるハンセン病——「祖国浄化」「国辱」

第四節 「疾患」「病氣」「病い」としてのハンセン病とその変容

第三章 現代社会における「病い」としてのハンセン病——宿泊拒否事件を通して

第一節 批判文書にみられる「病い」としてのハンセン病——先行研究レビュー

第二節 排除型社会の到来とハンセン病の他者化を生み出す「動力」

第三節 経済の悪化がもたらす社会の二極化とその世界的趨勢

第四節 排除と包摂の同時進行——支配文化の内面化・序列化・排除の論理

第五節 承認の不足がもたらすアイデンティティの序列化

第六節 差別、排除を生み出す土壌——経済、および文化的視点

第四章 ハンセン病問題の運動論的展開

第一節 「社会運動の戦略論」——医療化／病いの意味と語り

／ナラティブ・セラピー

第二節 社会運動論における「意味や解釈をめぐる問題」

第三節 新しい社会運動の文化的次元

第四節 フレイザーの「パースペクティヴ二元論」

第五節 「マトリクス四分割」

第六節 現実的戦略のために——非改革主義的改革・改善策の組み換え・境界戦略

第七節 ハンセン病をめぐる運動の文化的側面

第五章 中国ハンセン病回復村ワークキャンプにおけるハンセン病の「再」表象

第一節 親密圏と公共圏の観点からみたハンセン病問題

第二節 中国におけるハンセン病と回復村でのワークキャンプ活動

中国のハンセン病概略

ハンセン病回復村でのワークキャンプ

第三節 ボランティアとワークキャンプ—公共性をめぐる相違と親密性の位置取り

第四節 参加学生の中での変化——「文化コード」と「名づけの権力」

第五節 ワークキャンプにおける公と私の円環——「帰る」という言葉

「公」と「私」の円環運動

「私」から「公」への再飛躍——ボランティア・コーディネーターの役割

第六節 ハンセン病回復村周辺住民のハンセン病の再表象

第七節 当事者におけるハンセン病の再表象

第八章 エンパワーメントの観点から変化を読み解く

第九節 ワークキャンプがもたらすもの

「ワークキャンプの可視的効果」

「居場所」と「承認」

第六章 承認欲求のもうひとつの接続先——自己実現型ボランティアの可能性と陥穽

第一節 承認欲求の安全な接続先

第二節 ボランティアの贈与性の帰結

第三節 ボランティア推進の趨勢と反省的視点

第四節 ボランティアの定義をめぐる議論とアイデンティティ問題

第五節 権力の介入領域の深化

第六節 善意の自発性とその行方

第七節 自我の発露と視座の転換

第八節 新しい公共空間

第九節 小括

結語 差別なき社会を目指すにあたって

ハンセン病差別が発動する次元——「病い」の表象とそれに抗する〈現われ〉

ハンセン病の表象——差別を生み出す土壌とメカニズム

排除型社会とアイデンティティの序列化

差別問題に対する文化的次元での対応——そのふたつの位相

ハンセン病の「再」表象——「文化コード」と「名づけの力」

親密圏から浮上する公共性——ワークキャンプという手法

自己実現型ボランティアの可能性と陥穽

ふたつの問いに対する応答

差別なき社会を目指すにあたって——「奇妙な国」が問いかけてくるもの

(三) 本論文の内容

第一章 病いの表象——医療人類学・医療社会学からのアプローチ

ハンセン病に限らず「身体の不調」をめぐる問題を検討し、ハンセン病問題の問題性の所在を明らかにする見取り図を描く。具体的には、医療社会学・臨床人類学的なアプローチから「身体の不調」をめぐる諸問題を考察する。

まず医療人類学アーサー・クラインマンの議論を参照して、「身体の不調」を医学的な面からのみでなく、社会学的、社会科学的な側面の視野に入れて検討する。次にクラインマン同様に「身体の不調」と社会との関連の着目するエルズリッシュ／ピエレの議論、その隠喩化を強調する批評家のスーザン・ソントグの論述、さらにはその表象を研究するサンダー・ギルマンの論考を検討して、考察を深める。

とくにギルマンの議論から「身体の不調」をかかえる者を排除する「社会的なメカニズム」に関して検討する。以上から第一に「身体の不調」に対する差別を考察するにあたり、どのような見取り図が描けるか、第二にそのなかでキーとなる次元は何かについて考察している。

その見取り図とは、クラインマンの概念をかりれば、次のように要約される。身体の不調を、「疾患」(医学的意味合い)、「病気」(制度的・政策的意味合い)、「病い」(社会的・文化的意味合い)の3つの視点から捉えるということである。そしてこの3つの意味合いの中で、キーとなる次元とは「病い」(社会的・文化的意味合い)であり、換言すればこれは、「病いの表象」であることを本論文では示している。

第二章「病い」(illness)、「疾患」(disease)、「病気」(sickness)としてのハンセン病

本章では第一章で描いた見取り図に従って、ハンセン病問題の所在を明らかにする。すなわち医学的な側面、制度的・政策的な側面、文化的・社会的な側面という3つの側面からハンセン病問題を検討する。

とくに前章で確認した鍵となる次元に注意して考察すると同時に、ここではハンセン病の3つの側面のそれぞれが、時代を経てどのように変容したか考察している。つまり第一の側面である医学的な意味合いのハンセン病は、治療法の確立によって、根本的にその意味を変えた。同様に第二の側面である制度的・政策的な意味合いとしてのハンセン病も、「らい予防法廃止」と「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟によってその意味を大きく変えた。

しかしながら、第三の側面である文化的・社会的な意味合いとしてのハンセン病は、中世・近世・近代それぞれの時代によって、排除されるロジックは変容したが、排除されることそれ自体は変化していない。そしてそれが現代社会でも同様であることを象徴的に示す出来事が、2003年の温泉ホテルにおけるハンセン病回復者に対する宿泊拒否事件であった。この事件は、中世でも近世でも近代でもなく、現代社会においてハンセン病がいかなるロジックで排除されているかを読み解く上で、重要な意味をもつ。

本論は第一章でみたクラインマンやギルマン、エルズリッシュ／ピエレ、ソントグらの

見解の考察によって、「病気の社会的表象」——representation——に、差別の中心的次元を見定めている。これは、先にみたハンセン病の3つの側面のうち、第三の側面である文化的・社会的意味合いに相当する。そしてこれは、社会的に構築されるものであるから、時代的に変遷するという立場に立ち、その変容のあり方を検討している。

第三章 現代社会における「病い」としてのハンセン病——宿泊拒否事件を通して

本章では、現代社会においてハンセン病にはいかなる表象が社会的に構築されているのかを宿泊拒否事件を通して探る。さらにギルマンの指摘に従って、そのイメージ構築の背後にあるメカニズムや動力にも着目し、どのような社会的、経済的な背景のもとで、ネガティブな社会的表象が構築されるか、そして排除の論理が組み立てられるに到ったかについて検討している。

第一に、現代社会における「ハンセン病の表象」を読み解く。先行研究が示すところでは、宿泊拒否事件に際するハンセン病療養所への批判文書から読み取れるハンセン病の表象とは、次のようなものである。それはつまり、温泉という空間に侵入する異物としての表象や、税金で生活している存在としての表象などである。

これをふまえ第二に、人びとを差別に向かわせる「社会的背景」ないしは「心理的なメカニズム」はどのようなものか、差別を行使する人びとのメンタリティの位相を考察している。まずこの社会背景には、経済情勢が大きな影響を及ぼしている。そしてそこから生まれる差別を行使する人びとのメンタリティとは、簡潔に言えば次のようなものである。経済の悪化がもたらす経済的な格差の進展が、不平等・貧困といった分配の問題として立ち現れるのみでなく、仕事の場における承認の不足として立ち現れる。そしてこの承認の不足を埋め合わせるために、自分より下位の存在を呼び出そうとする心理的なメカニズムが、差別を発動させていることを明らかにする。

第四章 ハンセン病問題の運動論的展開

本章の目的は、第三章で具体的に明らかにしたハンセン病の文化的・社会的位相の第一のもの——ハンセン病の表象——の問題を、運動論のなかで理論的に位置づけることである。つまり、前章で明らかにしたハンセン病の表象の問題に対し、運動として取り組む際の見取り図を描くことを試みる。具体的には、ハンセン病のネガティブな社会表象をポジティブなものに変えてゆく——「再」表象する——運動とはどのようなものか、について考察している。

これに対して、新しい社会運動論のひとつの潮流である「フレーム理論」を援用し、「意味や文化や解釈」(クロスリー)の問題に焦点を当てる。つまりハンセン病の再表象の問題に対して、ハンセン病の意味やその解釈、そしてそれらに影響を与える文化に着目して考察する。その際、「文化コード」(アルベルト・メルッチ)や「再分配と承認」(アクセル・ホネット/ナンシー・フレイザー)の概念を参照している。

ここでの考察により、ハンセン病の表象を規定するもの、つまり「文化コード」が、差別問題をめぐって引き起こされる社会運動の重要なポイントであることを明らかにしている。それをふまえ、フレイザーの考察を参照して、ハンセン病の再表象の道筋として、多文化主義的なあり方と、脱構築主義的なあり方の2つを提示する。この観点から、近年の日本におけるハンセン病をめぐる運動を多文化主義的なものとして位置づける。そしてハンセン病の再表象の問題にとって、脱構築的な運動とはどのようなものであるかという問題を提起し、それを次章にて検討する。

第五章 中国ハンセン病回復村ワークキャンプにおけるハンセン病の「再」表象

本章では、前章において運動論の観点から理論的に示された道筋を、事例を考察することによって補強すると同時に、詳細な考察へとつなげていく。具体的には、2000年代より開始された中国のハンセン病回復村での学生らのボランティア活動(ワークキャンプ)に焦点をあて、その脱構築主義的な側面を明らかにする。

ここでハンセン病問題に対する数ある社会運動のなかでワークキャンプを取り上げるのは、ワークキャンプという活動では労働奉仕とともに、「親密圏」の形成に力点が置かれるところに特性があるとみなすからである。

これまでハンセン病問題——具体的に言えば、ハンセン病回復者の人権の問題——は、社会運動によって政治的公共圏の俎上に載せられ、法の廃止など制度面で一定の前進を見せた。にもかかわらず、宿泊拒否事件が示したのは、親密圏に近い領域、つまり入浴する、「仕事の疲れを癒す場」においては、それに見合うような進展がなかった。

本章はこのような問題意識——公共圏に比して親密圏、およびそれに近い領域におけるハンセン病問題の停滞——から、ハンセン病問題に関して「公共圏」ではなくむしろ、「親密圏」に着目してハンセン病に関する運動のあり方を検討している。そしてこの活動のもつ可能性を、「文化コード」や「再分配と承認」の観点から読み解いてゆく。

このような考察から本論文では、親密圏の形成を重視するワークキャンプによって、ハンセン病の表象が脱構築的に変容していることや、ハンセン病の表象を規定する文化コードを改編させていることを明らかにする。

第六章 承認欲求のもうひとつの接続先——自己実現型ボランティアの可能性と陥穽

本章では、第三章で検討した差別を生み出す土壌とそのメカニズムを踏まえうえて、その事前的な対応を検討する。つまり差別を行使する人びとのメンタリティの位相に焦点をあてる。

差別問題における社会的・文化的次元に関して本論文では、2つの位相を提示する。第一は、ハンセン病の表象の位相である。そして第二に、差別を発動させる承認、ないしはアイデンティティの序列化の位相である。通常、差別問題における社会的・文化的次元とは、差別の対象となる存在のネガティブなイメージを、いかにして変えていくかが争点と

なろう。しかし本論文ではそこからより踏み込んで、差別を行使する側に関して、社会的・文化的次元から検討を加え、差別問題を事前に防止する方策を検討するものである。

第一の「ハンセン病の再表象」の位相については、第四章で理論的に、第五章では事例に即して実践的に考察した。これをふまえ本章では、第二の位相、つまり差別を発動させる動力となりうる「承認欲求」ないしは「アイデンティティの序列化」という位相に関して考察する。それは、第三章での考察した差別を発動させる心理的メカニズム——承認欲求とアイデンティティの序列化——を事前的に冷却する方策に関する検討といえよう。

第一に「承認の不足状態」から差別を生みださないための処方箋は何か、第二のその処方箋が内包する陥穽はどのようなものか、また、それを乗り越える方策は何かという考察である

この考察により、ボランティア活動が承認欲求のもうひとつの接続先となりうることを理路的な考察とともに、データを通して示す。しかしながら承認欲求を原動力とするボランティア活動は、承認に重点が置かれると、活動の帰結を看過しがちになる陥穽があることを示す。そしてそのような陥穽を避けるために、新しい公共空間の存在やそこにおける自由な議論が必要であることを明らかにする。